

# 經濟論叢

第129卷 第1・2号

---

アイデンティフィケーションと

アイデンティティ	渡瀬浩	1
組織間関係戦略と企業業績	赤岡功	16
アメリカにおける失業保険制度の成立	井本正人	41
現代カナダ農業の構造と農民層分解	松原豊彦	68
関一の都市財政論	関野満夫	94
商品価値測定における諸問題	中西貢	114

経済学会記事

---

昭和57年1・2月

京都大學經濟學會

# 現代カナダ農業の構造と農民層分解

—Census of Canada, Agriculture を中心に—

松 原 豊 彦

## はじめに

世界第2位の小麦輸出国であるカナダの農業問題がわが国で注目されるようになったのは、1970年の小麦「9割減反」計画発動以来のことである。カナダ連邦政府は、1960年代後半に累積した膨大な小麦在庫を一掃するために、小麦作付面積を前年度の10分の1に削減するという、他の資本主義諸国に例をみない大規模な生産調整計画に着手した<sup>1)</sup>。小麦だけではない。豚・鶏肉・鶏卵・牛乳などの主要農産物は、いずれも1960年代後半から「過剰」と価格低落に見まれ、農業経営は苦境に陥った<sup>2)</sup>。農産物「過剰」の下で農業危機が発現している点においては、カナダも先進資本主義諸国の例外ではない。

以上のようなカナダの農業問題とそこに内在する諸矛盾を摘出するうえで、農業構造の変化と農民層分解の実態の把握は欠くことのできない重要な課題である。ところが、わが国でのカナダ農業の実証的研究はその緒についたばかりで、若干の報告・紹介<sup>3)</sup>があるとはいえ、カナダの農業問題を農業構造の変化

1) 実際に減少した小麦作付面積は前年度の2分の1、1,240万エーカーであった。これはわが国の水田面積(1970年)の1.5倍にあたる。

2) 豚の価格は、1969年10月から71年4月までの1年半に50%以上下落し、家禽・鶏卵の「過剰」生産はいくつかの州が互いに他の州からの移入を阻止しようとして、「チキン・卵戦争」をひきおこした。乳価低落のために酪農家が牛乳を畑に投棄する事件もおきている(H. E. Bronson, *Continentalism and Canadian Agriculture*, in G. Teeple (ed.), *Capitalism and National Question in Canada*, 1972, p. 123.)。

3) 主要なものに、須田勇治、カナダの小麦「9割減反」を見て、「農政調査時報」186号、1970年11月、玉井虎雄、カナダ—自由経済体制に固執し、現代的対応に遅れをとる、「農林統計調査」1975年8月、石関良司、最近におけるカナダ農業の動向——「食糧危機」前後における小麦生

や農民層分解との関わりで立ち入って分析した研究はきわめて少ない。筆者の知り得た限りでは、カナダにおいてさえこの課題に本格的接近を試みた研究はごく少ないようであるが、D・ミッチェル (Donald Mitchel) の著作『食糧の政治学 (The Politics of Food)』<sup>4)</sup>の中の1章「農場経営者の階層分解 (Farmers: A Class Divided)」で、カナダの農業構造と農民層分解の特徴がやや詳しく述べられている。ミッチェルの著作はこれまでわが国では紹介されていないので、彼の見解を以下に要約しておこう<sup>5)</sup>。

(1) 第2次大戦後、工業技術の農業への適用によって、農業経営に決定的な変化が生じた。その結果、大経営と小経営への階層分解がすすみ、農業集落 (agricultural community) の崩壊と都市化の進展、農外資本と農業の大経営との統合化という事態があらわれた。(2) その経済的要因は、第1に生産費上昇が粗所得の増加を上回る「コスト・プライス・スクイズ (cost-price squeeze)」であり、第2に土地価格の上昇によって経済的分化と生存競争が激化し、農場負債が増大したことである<sup>6)</sup>。(3) 「農場経営者間での階級再編 (realignment of 'class' among farmers)」がすすみ、大規模生産者による土地・資本の集積、穀物以外の作目での賃労働雇用の増大、小規模経営者の兼業増加という傾向がいちじるしい。「階級的方向への分極化 (the polarization along class lines) はカナダ農村の社会構造を他分野のそれに近づけている。」<sup>7)</sup>

生産の対応を中心として——、「農業総合研究」第32巻第1号、1978年1月、三田保正、カナダ経済と農業の明暗、「北方農業」1978年7～9月、がある。カナダ農業経済の包括的紹介として、やや古いが、岩下龍一「カナダの農業経済」1959年、がある。

4) D. Mitchel, *The Politics of Food*, 1975. なお、この著作は農民層分解にとどまらず、アグリビジネス (農業関連企業) による流通・加工支配の実態と連邦政府の食糧・農業政策を全体として描き出し、カナダの食糧・農業問題の所在と政策選択の方向を提示した労作である。

5) *Ibid.*, pp. 11～31.

6) とくに平原諸州では、外国資本や不在地主による土地取得が増大し、大きな問題になっている。これに対して、サスカチュワン州政府は、土地を購入して農場経営者に貸しつけるサスカチュワン土地銀行 (Saskatchewan Land Bank) を1972年に設立した (*ibid.*, pp. 21～25)。

7) *Ibid.*, p. 26.

ここに紹介したミッチェルの見解は、われわれがカナダの農業構造と農民層分解の研究を進めるにあたって重要な指針となるものだが、さらに掘り下げて検討すべき重要な問題がいくつか残されている。第1に、大経営と小経営への分化が進んだというが、彼のいう「大経営」と「小経営」のそれぞれの経済的・階級的な性格規定は必ずしも定かでない。つまり、農業経営の階層区分が明確でないのである。第2に、階層区分が明確でないことから、農民層分解がどの時点でどこまで進んだのかという、いわゆる“定量分析”がなされていないといってよい。こうした問題にとりくむには、何よりもまずカナダの農業センサス資料 (Census of Canada, Agriculture) を用いた実証作業が必要である。

そこで本稿では、さしあたり農業生産部面に視野を限定し、1961年以降のセンサス資料<sup>8)</sup>に主に依拠して、筆者独自の手法で農業経営の階層区分を行ない、カナダにおける最近の農民層分解の進展とその基本的特徴を明らかにする。あわせて、近年カナダでめだっている農外資本の農業生産部面への進出の実態についても若干の検討を加える予定である。なお、本稿の内容と関連させて、1970年の小麦生産調整下での穀物農場の動向を分析する予定であったが、紙数制約のため別稿にゆだねることとした。

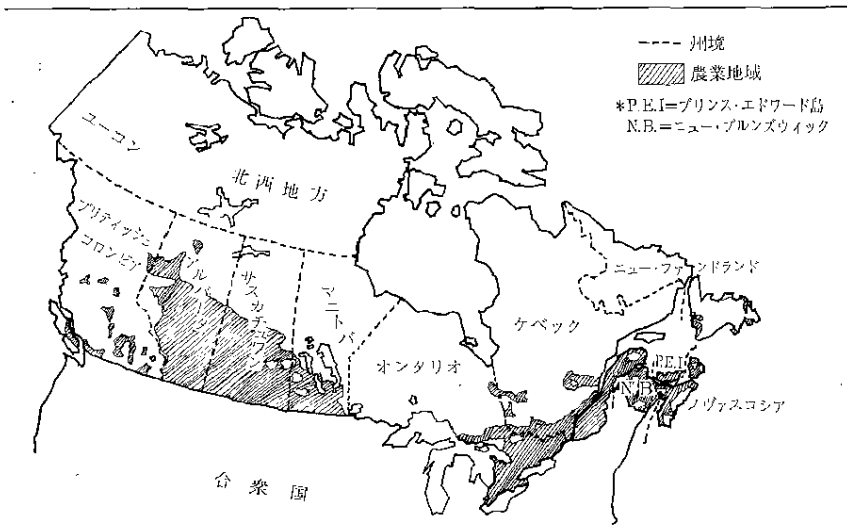
## I 第2次大戦後の農業構造の変化

カナダ国土の大部分は針葉樹林とツンドラにおおわれ、農地は南部に集中している (第1図)。カナダ農業は地域ごとに変化に富んでおり、広大な耕地に

8) カナダのセンサス資料を取り扱う上での注意点をまとめて列挙しておこう。①1976年センサスでは「センサス農場」の定義変更 (販売額50ドル以上から1,200ドル以上へ) のために、それ以前の定義による農場数と比べて約3万農場が脱落している。②センサスは農産物販売額別に農場を区分しているが、上層はあまりくわしく区分されていない (たとえば1976年センサスでは販売額10万ドル以上の約1万2千農場が一括されている)。③最近のインフレーションと農産物市場の大きな変動のため、農産物販売額が短期間に急増する傾向が生じている。このため同じ販売額の農場群でも年次が異なるものを直接比較するのが困難である。④1971年センサスの対象期間 (1970年6月1日～1971年5月31日) は小麦生産調整と重なったため、小麦農場の作付面積・支出額・販売額は平年をかなり下回ったと思われる。

大規模穀作と畜産が展開する平原諸州（マニトバ・サスカチュワン・アルバータ）、畜産・酪農と集約的作物（果実・野菜・たばこ）中心のオンタリオ州、旧フランス植民地で小規模酪農主体のケベック州<sup>9)</sup>、最も早くから商業的農業の展開をみた馬鈴薯・果実中心の大西洋岸諸州<sup>10)</sup>、といった主要農業地帯に分けられる。

第1図 カナダ全図



(出所) Agriculture Canada, *Farming in Canada*, 1975, pp. 30~31.

ここでは、第2次大戦前と現在とを比較しつつ、カナダ全体の農業構造の変化を概観することにしよう(第1表)。大戦前(1901~41年)には西部・平原諸州での農業生産の発展を反映して、農場数は51.1万から73.3万へと増勢を続け

9) ケベック州の土地所有制度は、他の旧イギリス植民地諸州と歴史的事情を異にする。同州では17世紀に領主制 (the seigneurial system) と呼ばれる「封建的土地所有制度」が導入され、カナダ連邦結成直前の1853年まで存続していた (B. Bernier, "The Penetration of Capitalism in Quebec Agriculture," *Canadian Review of Sociology and Anthropology*, Vol. 13, No. 4, 1976, p. 425)。岩下前掲書110-112ページをも参照されたい。

10) ニュー・ファンドランド、プリンス・エドワード・アイランド、ノヴァ・スコシア、ニュー・ブルンズウィックの4州。

第1表 農業構造の変化 (1901~1976年)

	農場数	耕地面積	平均耕地面積	機械台数		肥料購入量	農業従事者	
	(1,000)	(万エーカー)	(エーカー)	トラクター (1,000台)	コンバイン (1,000台)	(1,000 t)	(1,000人)	全労働人口 に占める割合 (%)
1901	511	3,017	59.0	...	...	...	...	...
11	682	4,873	71.4	...	...	...	...	...
21	711	7,077	99.5	47	...	...	...	...
31	729	8,573	117.6	105	9	...	...	...
41	733	9,164	125.0	160	19	280*	1,339*	31.5*
51	623	9,685	155.4	400	91	771	939	18.4
61	481	10,340	215.0	550	156	1,077	681	11.2
71	366	10,815	295.4	597	163	2,111	510	6.3
76	339	10,929	322.8	635	164	3,065	474	5.0

注 1) ...は資料なし

2) \*は1935~39年平均

3) 1976年の農場数には定義変更のため脱落した農場を補ってある(以下の表でも同じ)。

出所) *Census of Canada, Agriculture* (以下 *Census.* と略す) 各年次、*Selected Agricultural Statistics for Canada*. 1978 (以下 *Selected.* と略す)。

た。ところが、大戦後は一転して減少し続け、1976年の農場数は33.9万と大戦前最高時(1941年)の2分の1を下回っており、いかに急速なテンポで戦後に離農が進んだかがわかる。他方で、総耕地面積は現在まで一貫して増加し続け、1976年の1農場平均耕地面積は323エーカーと1941年当時の2.5倍になった。大量の離農と機械化の進展とが、農場経営面積の大規模化を可能にしたのである。1941年に16万台であったトラクターは76年に63.5万台と4倍に(1農場当たり台数は0.22台から1.87台へ)、またコンバインは同じ期間に1.9万台から16.4万台へと実に8.6倍にも増えている。1960年代後半からは農場数の減少もあって、機械台数の増加が鈍化しているが、機械の大型化が進むという傾向が顕著である。たとえば、トラクター販売台数全体に占める大型トラクター(100馬力以上)の比率は、1969年には10%だったが76年には40%に伸びている<sup>11)</sup>。機械化の進

11) *Agriculture Canada, Statistics relating to Farm Machinery in Canada; 1950 to 1976*, 1977, p. 67.

展は土地利用型経営だけに限らず、畜産・酪農部門では飼料・水・敷きわらの自動供給装置が普及し、現在では果物・たばこなどの一部農作業を除くほとんどの農作業に機械が使用されている<sup>12)</sup>。

機械化とならんで、農業生産の集約化・化学化の進んだことが最近のカナダ農業の特徴である。農場の肥料購入量は、1935～39年平均と1976年との比較で10.9倍にも増加し、これまで粗放的農業が支配的だといわれていた平原諸州でも、作付面積1エーカー当りの肥料使用量が1960年以降の9年間で5倍化した<sup>13)</sup>。また、農薬支出額も1961～76年に6.1倍に増え、しかもそのうちで除草剤は11.8倍になっている<sup>14)</sup>。その結果、主な耕種作物の単位面積当りの収量は、大戦前に比べていずれも2倍以上に増加した(第2表)。戦後におけるカナダ農業の生産力発展は、機械化による労働生産性の上昇とともに、集約化・化学化による土地生産性の上昇によっても助長されてきたのである。

第2表 作付1エーカー当り収量 単位：ブッシェル

	小麦	大麦	とうもろこし	亜麻仁	馬鈴薯
1935～39平均	12.2	20.7	40.8	4.9	74.9
1951	21.9	31.3	50.6	8.2	105.0
1961	11.2	20.4	73.0	6.9	144.3
1971	27.3	43.0	82.2	12.7	181.8
1976	31.2	44.9	84.7	13.6	196.3
76年の指数 (35～39平均=100)	256	217	208	278	262

注) 馬鈴薯の単位は100ポンド。  
出所) *Selected*, 1978, p. 103.

最後に農業労働力の動向をみると、農業従事者は戦前(1935～39年平均)の134万人から76年の47万人へと激減し、カナダの労働力人口に占める農業従事者の比率も32%から5%へと大幅に低下した。

12) Missiaen and Coffing, *CANADA; Growth Potential of Grain and Livestock Sectors*, U. S. Department of Agriculture, June 1972, p. 61.

13) *Ibid.*, p. 55.

14) Agriculture Canada, *Selected Agricultural Statistics for Canada*, 1978, p. 158.

以上をまとめると、戦後カナダの農業構造の変化は、機械化と集約化を軸とする農業生産力発展の中で、農場数と農業従事者数の大幅な減少および1農場平均での経営面積拡大が急速に進んだことを特徴としている。ミッチェルは、この変化が工業技術の農業生産部面への適用によって生じており、その中で農民層分解が進展し、農村社会の土台が根底から揺るがされていると述べている。「工業技術のあらゆる力が適用されるにつれて、この20～30年の間に、カナダの農村に一種の革命が生じている。戦後の趨勢が……しだいに、だが徹底的に農業を再編してきた」。「農業集落は経済的・政治的に引き裂かれ、大経営と小経営の格差はますます拡大した。1960年代には『農民の立場』と特徴づけられる単一の政治的立場がもはやありえないほど、2つの大きな・相争う傾向が農業集落に現われた」<sup>15)</sup>と。

ミッチェルの指摘は、ここに引用したかぎりでは正鵠を得ているといえよう。そこでわれわれはさらに分析の歩を進めて、彼のいう「大経営」および「小経営」がどのような経済的・階級的な性格規定を与えられるべきかを考察することしよう。

## II 農場の階層区分と農民層分解の進展

### (1) 販売額別階層区分の加工・修正

カナダの農業センサスは、農産物販売額によって農場の階層区分を行っている。カナダのように地域や作目によって集約度が著しく異なる国では、一般に、経営面積規模による階層区分よりも、農産物販売額による区分方法の方がはるかに合理的である。というのは、「経営の生産物の価額は、経営規模を間接にではなく直接に、しかもあらゆるばあい証明する」<sup>16)</sup>からである。ところが、近年インフレーションや世界穀物市場の激しい変動のために、農産物価格が短期間に大きく膨れあがる傾向が生じている<sup>17)</sup>。そのため、同じ販売額に区分さ

15) Mitchel, *op. cit.*, p. 11 and p. 14.

16) レーニン「農業における資本主義の発展についての新資料」、邦訳「全集」第22巻、72ページ。



れる農場群であっても、年次が異なれば直接比較することが困難である。たとえば、販売額2.5万ドル以上の農場数は1961年にはわずかに1万足らずだったが、1976年には10万を越えて全農場数の30%以上を占めている<sup>17)</sup>。これらの農場群を販売額が同じであるという理由で、農場数の年次別推移を問題にすることは当を得ていない。

そこで1つの試みとして、一定の基準で販売額別区分を加工して、経済的・階級的な性格をほぼ等しくする農場群をとり出す筆者独自の方法を用いることにする。農業経営の経済的・階級的な性格を直接に規定するのは、いうまでもなく賃労働の使用である。F・エンゲルスやB・И・レーニンによれば、資本主義的経営と農民的経営とを区別する基準は、雇用労働により多く依存しているのか、それとも家族労働により多く依存しているのかということである。また、農民的経営とプロレタリア的経営とを区別するのは、独立して農業を営むことが多いのか、それとも他人に雇われて働くことが多いのかということである<sup>18)</sup>。中野一新氏はレーニンのドイツ農業研究に依拠して、資本主義諸国における農業経営の階層区分指標を次のように定式化している。

「資本主義経営；賃金労働者が家族労働者よりも多い経営群。大農経営；賃金労働者を常時使用せずにはやっていけない経営群、具体的には常用労働者1人以上と若干の臨時雇用労働者を使用する経営群。中農経営；2ないし3経営のうち1経営で賃金労働者を使用する経営群。小農経営とプロレタリア経営；賃金労働者をほとんど使用しない経営群。」<sup>20)</sup>

17) 1961年を100としたカナダの農産物価格指数は、1966年112、1971年131、1976年には218であった (*Selected*, p. 171)。周知のように、1972年秋以降の世界的な穀物価格高騰の影響が大きく、カナダ小麦局の小麦売渡価格（ノーザン1号、サンダー・ベイ）は1971/72年度のブッシェル当たり1.69ドルから、1972/73年度の2.63ドル、1973/74年度の5.49ドルとわずか2年間に3.3倍も急騰した (*Canadian Wheat Board, Annual Report 1975/76*)。

18) 1961 *Census of Canada*, Vol. V, Part 1, —以下1961 *Census*. と略記 —Table 31, 1976 *Census*. Table 25.

19) エンゲルス「フランスとドイツにおける農民問題」、邦訳「マルクス＝エンゲルス全集」第22巻、483ページ。レーニン「現代農業の資本主義的構造」、邦訳「全集」第16巻、449-450ページ。

20) 中野一新、合衆国の大規模農場経営の位置とその階級的な性格(3)、「経済論叢」第118巻第3・4号、1976年9・10月、19ページ。

ここでは、ひとまず氏の用いた階層区分指標にしたがって、カナダの各農場群の特徴づけを行う。カナダの農業センサスからは、賃労働者の使用に関する指標として、①雇用労働週数 (weeks of paid labor) ②通年雇用労働者数 (number of paid year round workers) ③賃金支出額、の3つを利用できるが、ここでは賃労働の使用状況を最も包括的にあらわしている雇用労働週数(1年間ののべ雇用週数)を階層区分の指標にとりあげる。

第3表は、販売額階層別に1農場あたりの雇用週数を示している。1961年の販売額2.5万ドル以上層の1農場当り雇用週数は142.7週で、かりに賃労働者1人の雇用日数を150日として換算すれば5.7人分に相当する<sup>21)</sup>。61年センサスによれば、同じ階層の無給家族従事者の労働は1農場当り19.7週(0.8人)であり、経営者の労働を年間最大限300日(2人)と仮定して加えても、自家労働の合計はおよそ70週(2.8人)で雇用労働の2分の1にも満たない。つまり、1961年の2.5万ドル以上層は雇用労働が自家労働の2倍以上に及び、資本主義経営にあたる。なお、以下ではこの階層のように全体として資本主義経営に相当する農場群をクラスⅠと呼ぶ。1961年の1~1.5万ドル層と1.5~2.5万ドル層は、雇用労働が自家労働を下回るが、賃労働者を常時使用している大農経営である(同様にこれをクラスⅡと呼ぶ)。また5,000~1万ドル層は、2ないし3経営に1経営は賃労働者を使用する中農経営(クラスⅢ)であり、5,000ドル未満層は小農経営およびプロレタリア経営である。ここでは、5,000ドル未満層のうちで兼業農場<sup>22)</sup>が半ば以上を占める農場群をプロレタリア経営(クラスⅤ)とし、残りを小農経営(クラスⅣ)とする(第3表(a))。

以上の階層区分方法を1971年及び76年センサスに適用したのが、第3表の(b)

21) 年間雇用日数150日を1人と換算したのは、カナダにおける農業労働の季節性と作物成育期間の短かさを考慮したためである。合衆国の農業センサスでは常雇労働者(regular worker)を年間雇用150日以上250日未満としているが、カナダは合衆国よりも作物成育期間が短く、無霜日数は平原州で80~115日、最も温暖なオンタリオ州南西部でさえ200日であることを考えれば、この想定は妥当であろう。

22) カナダのセンサスで「兼業(off-farm work)」というのは、農場経営者が自らの農場以外で賃労働に従事することで、経営者以外の家族員の農外賃労働は含まれていない。

第3表 賃労働雇用と兼業を指標とする階層区分

(a) 1961年

販売額	農場数		賃労働			兼業農場 の比率 (%)	1農場当り 家族労働週数		クラス
	実数	構成比 (%)	1農場当り雇用週数		雇用農場 の比率 (%)		経営者を 除く	経営者を 含む	
			週	(人数換算)					
2.5万ドル以上	9,507	2.0	142.7	(5.7)	92.1	11.8	19.7	69.7	I
1.5万～2.5万ドル	14,411	3.0	45.2	(1.8)	83.0	13.6	18.3	68.3	II
1万～1.5万	25,923	5.4	23.5	(0.9)	72.1	14.6	16.9	66.9	
5,000～1万	90,419	18.8	10.7	(0.4)	53.8	16.9	15.3	65.3	III
3,750～5,000	49,754	10.3	6.0	(0.2)	41.4	21.2	14.9	64.9	IV
2,500～3,750	69,023	14.4	4.4	(0.2)	35.9	26.2	14.3	64.3	
1,200～2,500	94,256	19.6	3.1	(0.1)	29.1	35.6	13.0	63.0	
250～1,200	82,946	17.2	1.7	(0.1)	20.3	51.8	10.2	60.2	V
250ドル未満	43,850	9.1	1.1	(0.0)	11.2	60.0	5.9	55.9	
合計	480,903	100.0	10.0	(0.4)	38.4	32.0	13.2	63.2	

注) (a)の「経営者を含む家族労働週数」は経営者の労働日数を年間300日(50週)と仮定して加えてある。

## (b) 1971年

販売額	農場数		賃労働				クラス
	実数	構成比 (%)	1農場当り雇用週数		雇用農場の比率 (%)	兼業農場の比率 (%)	
			週	(人数換算)			
5万ドル以上	10,443	2.9	141.7	(5.7)	84.0	15.4	I
3.5万~5万ドル	9,026	2.5	41.5	(1.7)	74.5	17.4	II
2.5万~3.5万	14,060	3.8	28.1	(1.1)	68.7	18.8	
1.5万~2.5万	36,869	10.1	13.3	(0.5)	59.0	20.4	III
1万~1.5万	42,794	11.7	7.2	(0.3)	47.6	23.6	
7,500~1万	34,452	9.4	6.7	(0.3)	39.9	27.2	
5,000~7,500	47,661	13.0	3.6	(0.1)	33.0	31.8	IV
3,750~5,000	28,946	7.9	2.8	(0.1)	27.9	37.1	
2,500~3,750	34,008	9.3	2.2	(0.1)	24.4	42.2	
1,200~2,500	40,833	11.2	1.6	(0.1)	20.4	49.1	V
1,200ドル未満	66,260	18.1	1.0	(0.0)	11.2	54.4	
合計	366,128	100.0	10.5	(0.4)	35.3	35.3	

## (c) 1976年

販売額	農場数		賃労働				クラス
	実数	構成比 (%)	1農場当り雇用週数		雇用農場の比率 (%)	兼業農場の比率 (%)	
			週	(人数換算)			
10万ドル以上	12,349	3.6	126.7	(5.1)	77.1	11.3	I
7.5万~10万ドル	9,189	2.7	33.7	(1.3)	66.0	11.6	II
5万~7.5万	22,120	6.5	20.1	(0.8)	56.3	12.4	
3.5万~5万	27,288	8.1	11.8	(0.5)	46.4	14.8	III
2.5万~3.5万	33,021	9.5	8.0	(0.3)	37.5	18.0	
1.5万~2.5万	46,129	13.6	5.4	(0.2)	30.2	24.0	IV
1万~1.5万	35,363	10.4	3.9	(0.2)	24.7	32.4	
5,000~1万	45,791	13.5	3.0	(0.1)	20.7	42.1	
2,500~5,000	37,874	11.2	2.2	(0.1)	17.5	51.0	V
1,200~2,500	31,223	9.2	1.7	(0.1)	13.9	54.5	
1,200ドル未満	38,460	11.4	0.8	(0.0)	6.6	55.7	
合計	338,578	100.0	10.9	(0.4)	29.2	33.9	

出所) 1961 Census. Table 31. 1971 Census. Table 52. 1976 Census. Table 25.

と(c)である。ただし、農業センサスが無給家族従事者についての資料を与えているのは1961年だけであるが、後述するように(第5表)無給家族従事者数はその後ずっと減少傾向を示している。したがって、61年センサスから得られる自家労働の最大限70週という数字を用いて、71年と76年センサスの階層区分を行っても、自家労働週数を多めに見つめることになり、決して過少に見つめることにはならないと思われる。

## (2) 農民層分解の進展

——資本主義経営の増大と賃労働比率の上昇——

前項でひととおり農業経営の階層区分を行ったので、それにもとづいて農民層分解の動向を検討しよう。第4表は、筆者の階層区分方法によるクラスⅠ～

第4表 クラスⅠ～Ⅴの農場数の変化

	クラス	1961	1971	1976	1961～76年 の増減	61年を100と する指数
農 場 数	Ⅰ	9,507	10,443	12,349	+ 2,842	130
	Ⅱ	40,334	23,086	31,309	- 9,025	78
	Ⅲ	90,419	114,115	59,309	-31,110	56
	Ⅳ	213,033	110,615	127,283	-85,750	60
	Ⅴ	126,796	107,093	107,557	-19,239	85
	合計	480,903	366,128	338,578	-142,325	70
構 成 比 (%)	Ⅰ	2.0	2.9	3.6	+1.6	—
	Ⅱ	8.4	6.3	9.2	+0.8	—
	Ⅲ	18.8	31.2	17.6	-1.2	—
	Ⅳ	44.3	30.2	37.5	-6.8	—
	Ⅴ	26.3	29.3	31.8	+5.5	—
	合計	100.0	100.0	100.0	—	—

出所) 前表に同じ。

Ⅴの農場数の推移を示している。その特徴は、第1に1961年以降の15年間で農場数全体の減少は14万農場以上にのぼり、クラスⅠを除くすべての階層で農場数が減っているが、クラスⅠだけが絶対数で増えていることである。第2に、クラスⅢとⅣは1961年の農場数を100とすると、76年にはそれぞれ56と60で減

り方が最も激しく、ごく一部の経営が上向する一方で、大多数が下層に移行したかあるいは離農（プロレタリア化）したことを示している。第3に、クラスIIとVは農場の絶対数は減っているが、クラスIII・IVほど減り方が大きくなく構成比ではむしろ増大している。とくに、クラスVが26.3%から31.8%へと5.5ポイント比率を高めたことは、下層農場のプロレタリア化の進行を如実に物語っている。センサス資料の分析によって、この15年間のカナダ農業における資本主義経営、大農経営およびプロレタリア経営の比重の増大（しかもクラスIは絶対数でも増えている）と、中農・小農経営の大幅な減少という両極分解の傾向が明らかになった。

次に賃労働者の使用状況を検討しよう。第5表は戦後の農業労働力構成の推移をあらわしている。農業従事者全体は、1951年から74年までに半減したが、雇用労働者数は10万人前後の一定した数を保ちつづけている。農場経営者と無

第5表 農業従事者の構成と推移

	農業労働力 (1,000人)				全体に対する比率(%)		
	雇用労働者	無給家族従事者	農場経営者	合計	雇用労働者	無給家族従事者	農場経営者
1951	100	243	596	939	10.6	25.9	63.5
56	103	160	514	777	13.3	20.6	66.2
61	112	133	436	681	16.4	19.5	64.0
66	98	110	336	544	18.0	20.2	61.8
71	102	118	291	510	20.0	23.1	57.1
74	99	103	271	473	20.9	21.8	57.3

注) 有給家族従事者は雇用労働者に含まれる。原資料が異なるため、センサスの雇用人数とは一致しない。

出所) *Selected*, 1978, p. 186. (原資料 Statistics Canada, *The Labor Force*)

給家族従事者の減少は激しく、農業従事者全体に占める比率を下げているのに対して、雇用労働者の比率は1951年の10.6%から74年の20.9%へと2倍に伸びている。家族労働力の大幅な減少と雇用労働力への依存度の急速な上昇とは、戦後におけるカナダ農業の資本主義的進化を端的に物語っている。近年のカナダほど農業における賃労働比率の大幅な上昇をはっきりと確認できる国は、先

進資本主義諸国の中では他に見られない。これは現代カナダ農業の特徴として大いに注目してよいであろう。

なかでも、クラスI農場における賃労働の集積には著しいものがある(第6表)。1961年から76年にかけて雇用週数全体はおおむね減少傾向にあるが、クラスI農場の雇用週数は増加し、全農場に対する比率は28.2%から42.4%へと高まっている。賃金支出額や通年雇労働者数についても同じ傾向が読みとれる。ミッチェルは戦後の農民層分解と賃労働の使用について以下のように述べた。

第6表 クラスI農場における賃労働の集積

			1961	1971	1976
実	雇用週数 (1,000)	クラスI	1,357	1,475	1,564
		全農場	4,805	3,832	3,687
数	賃金支出額 (百万ドル)	クラスI	67	109	—
		全農場	194	259	—
	通年雇労働者数 (100人)	クラスI	158	182	213
		全農場	475	386	440
クラスI/全農場 (%)		雇用週数	28.2	38.5	42.4
		賃金支出額	34.7	42.0	—
		通年雇人数	33.3	47.0	48.3

出所) 第3表に同じ。

「1945～75年の土地所有の趨勢は、大農場経営者と小農場経営者との間の富と農場規模の不均衡を異常に大きくしただけでなく、農場経営者の賃労働に対する関係をも変えた。より大規模な生産者による土地と資本の集積は、あらゆる作目に通ずる一般的傾向であった。これは穀物を除くほとんどの作目で、賃労働雇用の増大をも意味した。大農場経営者は1970年代までに大規模な資本投下を行っただけでなく、季節雇やフルタイムの農場労働者を大量に雇った。彼らは独立生産者という伝統的役割に加えて、あるいはむしろそれ以上に賃労働に対するボスとなった。」<sup>23)</sup>われわれは、農場の階層区分にもとづいて資本主義経

23) Mitchel, *op. cit.*, pp. 25～26

営における賃労働の集積を確認したので、それに加えて次のように言うことができる。ミッチェルのいう「大経営」の少なからぬ部分は資本主義経営である。カナダでは農場の両極分解が進む中で、農業労働力に占める賃労働の比重が絶えず上昇し、資本主義経営がますます多くの賃労働を集積してきた、と。

### III 上層経営における資本と生産の集積

—1971年センサスを中心に—

戦後カナダにおける農民層分解の過程は、上層経営（クラスⅠとⅡ）への資本と生産の集積をともなっていた。ここでの課題は、1971年センサスを用いて上層経営への資本と生産の集積度とその特徴を明らかにすることである。1971年センサスは小麦の生産調整と重なったため、小麦農場の諸指標が平年を下回っていると推測されるが、燃料・肥料の支出額、販売額といった重要なデータを調査集計している最新の統計である（残念なことに1976年センサスではこれらの指標にかかわるデータが欠落している）。そこで、本節では上記の制約を考慮しつつ1971年センサスを用いて分析を進める。

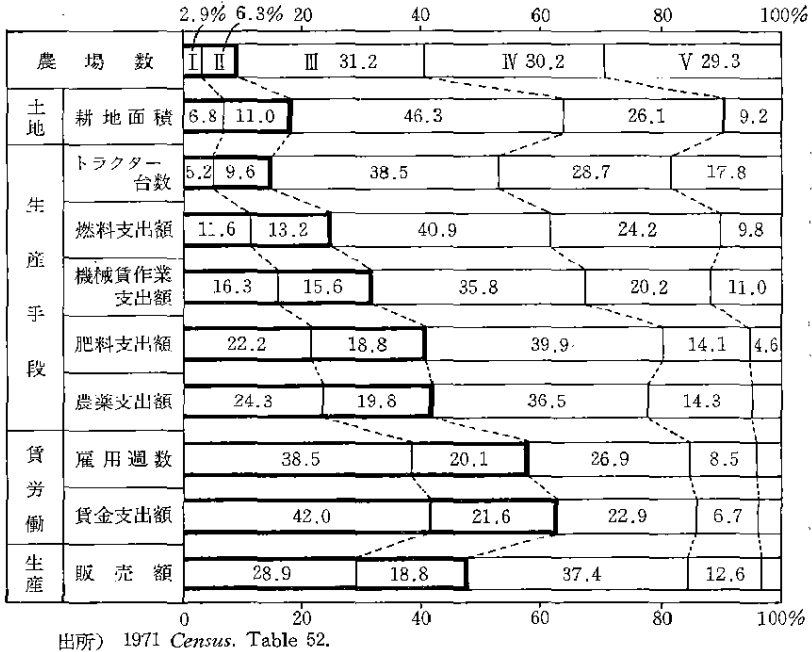
#### (1) 資本・賃労働の上層経営への集積

第2図は、土地・生産手段・賃労働・生産物に関わる諸指標について、クラスⅠ～Ⅴの各階層が占めているシェアを図示したものである。この図からわかるのは、第Ⅰに農場数のきわめて少ない上層経営が土地と資本の相対的に大きい部分を集積しており、クラスⅣやクラスⅤは農場数は多いが土地と資本に占める比率はずっと小さいことである。農場数では全体の2.9%にすぎないクラスⅠが、耕地面積の6.8%、燃料支出額の11.6%、肥料支出額の22.2%、農薬支出の24.3%を占め、クラスⅠとⅡの合計では耕地面積の17.8%、燃料支出額の24.8%、肥料と農薬の支出額の40%以上を集積している。しかも、平年ではクラスⅠやⅡに相当する小麦農場の多くが、1970年の小麦生産調整によって販売額を大幅に減らして71年センサスでは1ランク下の階層に含まれていると予



想されるので、第2図での上層経営の集積度は平常の実態よりも少なめに示されていると思われる。

第2図 クラスⅠ～Ⅴにおけるシェア（1971年）



第2に、前節で述べたように、上層経営への賃労働の集積がいちじるしいことである。クラスⅠだけで雇用週数の38.5%、賃金支出額の42.0%を占め、クラスⅠとⅡの合計では雇用週数の58.6%、賃金支出額の63.6%にまで及んでいる。ここで注意すべきは、クラスⅠの賃金支出額のシェアが雇用週数を上回っていることである。この事實は、資本主義経営では雇用量に対して賃金支出額が大きいこと、つまり賃労働の中に単純な手作業とならんで、熟練・資格を要する作業や管理労働も含まれていることを示唆している。「大規模生産単位の成長にともなって、農場労働者の性格がいく分変化してきた。農場労働者は新しい技術の取り扱いに相当習熟していなければならないし、他の労働者と集

団で労働する状況にしないでいられる。独立自営農民のために働き、家族経営の一部分となっていた伝統的な『雇われ人 (hired man)』は急速に消滅しつつある。古いスタイルの雇われ人は、農家族と住居・食事を共にする形で賃金の一部を支払われ、低賃金だがこちよ労働条件の下でしばしば生涯にわたって忠実に仕える。近代的な農場労働者は、はるかに移動性と独立性に富み、農場内外の独立した住居で自らの家族と生活することが多い。……変わらないのは、他産業のカナダ人労働者と比べての、農場労働者に対する搾取の規模である。』<sup>24)</sup>

上層経営とりわけ資本主義経営による賃労働の集積がすすむにつれて、農場労働者の性格が変化してきていることが上掲のミッチェルの叙述からもうかがえる<sup>25)</sup>。

## (2) 機械化・集約化の進展と農民層分解

前述したように、カナダにおける農業生産力の発展は、機械化による労働生産性の上昇と集約化・化学化による土地生産性の上昇とが並進する過程をたどってきた (I を参照)。上層経営での資本の集積は、この階層が農業生産力発展の主要な担い手であるとともに、生産力発展の成果を最大限に利用していることを示している。さきの第2図によると、クラス I と II でトラクター台数の14.8%、機械・施設価額の23.2%、燃料支出額の24.8%、機械賃作業支出額<sup>26)</sup>の31.9%を占めている。ここでわれわれの関心をひくのは、上層経営ではトラク

24) *Ibid.*, p. 28.

25) 農場労働者の性格が「近代的」になっているとはいえ、待遇や権利の面では依然として劣悪な状態におかれている。農場労働者には最低賃金法や労働基準が適用されないし、一部を除いて失業保険・年金の対象からも排除されている。また大部分の州で、いまだ労働組合結成の権利が認められていない。こうした無権利状態の中で、合衆国と同様にノオンコヤカリブ海諸国からの出稼ぎ労働者も相当数存在する。( *Ibid.*, pp. 28~30)。

26) 機械賃作業とは、機械による農作業を他人に請負わすことで、作業の受託者側が機械を所有し、委託者の依頼によって自分自身でできないしは他人を雇用するかして、委託者の農場の機械作業を行う。平原諸州での穀物収穫期には、国境をへだてて隣接する合衆国のモンタナ、ノースダコタ州から機械作業を請け負いにやって来ることが、しばしばある。

ター台数よりも機械の大小を含めてより正確に機械の保有程度をあらわす機械・施設の価額の方が集積度が高く、また、機械・施設の価額よりも実際の稼働率の高さを示す燃料支出額の方がさらに集積度が高いことである。1960年代後半以降の農業機械化の特徴が単なる使用機械台数の増大だけでなく、機械の大型化と広範な農作業部面への普及であることを考えあわせれば（Iを参照）、上記の事実は上層経営において機械の大型化と広範な部面への普及がいち早く進行したことを示していると思われる。ただし、クラスIIIが燃料支出額の40.9%を、クラスIVが24.2%をなお占めていることもまた確かであり、中農・小農経営も広範に利用できるほど機械使用が平準化していることにも留意しておかなければならない。

集約化・化学化については、上層経営での生産力の優位が一層明白である。第7表は耕地1エーカー当りの支出額をあらわしているが、燃料・機械賃作

第7表 階層別にみた集約度

	耕地1エーカー当り支出（ドル）				1エーカー当り 販売額（ドル）
	燃 料	機械賃作業	肥 料	農 薬	
I	3.3	1.4	4.0	1.4	163.6
II	2.3	0.8	2.1	0.7	65.7
III	1.7	0.4	1.0	0.3	31.0
IV	1.8	0.4	0.7	0.2	18.6
V	2.0	0.7	0.6	0.2	10.3
計	1.9	0.6	1.2	0.4	38.4

出所) 1971 Census. Table 52.

業・肥料・農薬のいずれの指標をとっても、上位階層ほど単位面積当りの支出額が大きい。とくに肥料支出額はクラスIがクラスVの6.7倍、農薬支出額は7倍と、資本主義経営での集約性の高さは群を抜いている。単位面積当りの販売額ではクラスIがクラスVの16倍にも及び、クラスIIをもはるかに上回っている。資本主義経営における集約的な資本投下の当然の結果であろう。

## (3) 生産の集積と作目間における集積度の相違

上層経営への資本・賃労働の集積は、その必然的な結果として生産の集積の進展をもたらした。第8表は農産物販売額の階層別分布をあらわしている。クラスⅠが販売額全体の28.9%を、クラスⅡが18.8%を占め、この両階層で販売額全体の47.7%を集積しているのに対して、クラスⅣとⅤを合わせても販売額全体の15.1%にしかならない。農場数で1割に満たない上層経営が生産の半ば近くを集積するところまで、カナダ農業の構造変化が進んでいる。

第8表 販売額のクラスⅠ～Ⅴへの分布 (1971年)

		販 売 額						
		合 計	畑 作	果物・野菜 など	家禽・鶏卵	畜 産	乳製品	その他
実 数 ( 百 万 ド ル)	Ⅰ	1,198	179	116	255	567	65	16
	Ⅱ	782	216	39	45	316	158	7
	Ⅲ	1,553	501	54	32	586	332	17
	Ⅳ	525	204	19	7	194	89	11
	Ⅴ	102	39	6	2	40	11	5
	計	4,148	1,140	237	343	1,708	659	61
構 成 比 (%)	Ⅰ	28.9	15.7	49.2	74.4	33.2	9.8	25.6
	Ⅱ	18.8	19.0	16.4	13.2	18.5	24.1	11.7
	Ⅲ	37.4	44.0	22.9	9.2	34.3	50.5	28.5
	Ⅳ	12.6	17.9	8.0	2.2	11.3	13.5	18.1
	Ⅴ	2.5	3.4	2.5	0.6	2.4	1.6	8.5
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注) 「果物・野菜など」には、温室・種苗を含む。

出所) 1971 Census. Table 52.

生産の集積を作目別にみると、その特徴がいっそう鮮明になる。家禽・鶏卵(74.4%)、果物・野菜など(49.2%)ではクラスⅠだけで生産の2分の1から4分の3を占めており、これらの集約性の高い部門での資本主義化の進展は目を見張らせるものがある。次いで、クラスⅠとⅡで生産の過半を担っているのが畜産(合計51.7%)である。畑作はクラスⅠとⅡで34.7%を占めているが、ク

ラスⅢが44.0%、クラスⅣが17.9%と中農・小農経営も比較的高いシェアを保っている。ただし、1971年センサスでは、小麦生産調整の影響で上層経営の多くで小麦販売額が大幅に減少したり、あるいは畜産の比重を高めるなどの対応をとったために、畑作における上層経営の生産集積度が相当低くあらわれていると予想される。くわしい分析は別稿にゆずるが、この点に注意して数字を読みとる必要がある。酪農（乳製品）は生産の33.9%が上層経営に担われているが、他方でクラスⅢが50.5%を占めており中農経営がなお相当な比重を保っている<sup>27)</sup>。

一握りの上層経営とりわけ資本主義経営による生産の集積は、現代カナダ農業の資本主義的進化を明確に証明している。しかも、この傾向は「家禽・鶏卵」と「果物・野菜など」というきわめて集約性の高い部門において特に目ざましい。

#### IV 法人農場とインテグレーション

最近のカナダ農業の特徴は、法人農場の増大と農外資本による農業生産部面への浸透である。これらの問題を取り扱うことなしには、カナダにおける農民層分解の実態分析も不十分とならざるをえない。そこで、以下では法人農場の中でもとりわけ資本主義的性格が明確な大規模法人農場（large incorporated non-family farm）の実態を明らかにするとともに、農外資本進出の主要な形態であるインテグレーションの現状についても検討を加えることにする。

##### (1) 大規模法人農場の資本主義的性格

27) 酪農経営の動向については、石関良司、最近におけるカナダ酪農の動向と政策、湯沢誠編「農業問題の市場論的研究」1979年、199-217ページ、に詳しい。それによると、「従来、カナダの酪農は西欧諸国の場合とほぼ同様に小規模であり、小農的家族経営によって担われる典型的な生産分野であったとみられるが、戦後、とくに60年以降の構造変化は急激であって、それまでの支配的形態であった小規模飼養層が大量に脱落するとともに、比較的少数農場による大規模化の傾向がいちじるしく進展しているが、それとともに、「なおいぜんとして小規模酪農層が少なからぬ比重をもって」いる点は注目される、としている（同上書、203ページ）。

1971年センサスによれば、カナダ全体の法人農場は7,992あるが、そのうち家族法人農場が7,081あるので企業的法人農場は911と数の上ではごく少ない<sup>28)</sup>。1971年センサスの課題別研究 (profile study) 「カナダの大規模農場 (Large Farms in Canada)」<sup>29)</sup>では、企業的法人農場のうち販売額2.5万ドル以上の経営を「大規模法人農場」として若干の資料を与えている。この資料を検討することでカナダにおける大規模法人農場の実態を見ることにしよう。

当該資料では、大規模法人農場を「販売額2.5万ドル以上」で「株式の支配的部分が経営者とその家族員とを除く株主に握られている法人」と定義している<sup>30)</sup>。これに該当するのはカナダ全土で432農場あり、そのうち42.5%がオンタリオ州に集中している。農場の型別にみると、肉畜、家禽、畑作（穀物を除く）、果物・野菜が多い。販売額別では10万ドル未満が216、10～50万ドルが179、50万ドル以上という巨大なものが37ある<sup>31)</sup>。

第9表は、大規模法人農場が農場数、賃労働雇用、資産額、販売額の諸指標についてどの程度のシェアを占めているかを示している。大規模法人農場の農場数は販売額2,500ドル以上層全体の0.2%にすぎないが、賃労働雇用の4.0%、資産額の1.0%、販売額の2.3%を担っている。資本・賃労働・生産の集積度は農場数の比率に比べればはるかに大きい。ところが、これを農場の型別にみると作目ごとに大きなちがいがあがる。家禽部門では、大規模法人農場が農場数の2.0%、賃労働雇用の13.6%、資産額の6.0%、そして販売額の9.7%を占めている。また、「果物・野菜」および「種々のもの」でも販売額の1割近くを担っている。これらの3部門では、農民層分解の進展の中で、大規模法人農場が生産において一定の位置を占めている。

28) 1971 *Census*. Table. 13.

29) 1971 *Census of Canada*, Vol. V, Part 3, Profile Studies, *Large Farms in Canada*, 1976.

30) *Ibid.*, p. 35.

31) *Ibid.* pp. 35-36.

第9表 大規模法人農場による生産の集中 (1971年)

	実 数				同じ型の農場全体に対する比率(%)				1農場平均	
	農場数	雇用(週)	資産額(1,000ドル)	販売額(1,000ドル)	農場数	雇 用	資産額	販売額	雇人数	販売額(1,000ドル)
酪 農	18	3,225	5,079	1,067	0.03	0.5	0.1	0.1	7.2	59
肉 畜	112	26,527	74,263	29,858	0.1	2.9	1.0	1.9	9.5	267
家 禽	113	28,764	34,232	31,941	2.0	13.6	6.0	9.7	10.2	283
穀 物	22	4,090	18,080	1,672	0.03	1.2	0.3	0.2	7.4	76
その他畑作	63	10,086	13,100	4,675	0.7	2.0	1.4	2.0	6.4	74
果物・野菜	72	28,102	35,833	12,476	0.9	6.0	5.4	9.3	15.6	173
種々のもの	28	40,981	17,203	12,157	0.6	11.9	4.6	9.8	58.5	434
複 合	4	707	4,552	317	0.02	0.4	0.4	0.2	7.1	79
全 体	432	142,482	202,312	94,163	0.2	4.0	1.0	2.3	13.2	218

- 注 1) 「同じ型の農場」は販売額2,500ドル以上。  
 2) 資産額は、土地・建物、機械・施設および家畜の価額合計。雇人数は1人を150日雇用として算出。  
 3) 「その他畑作」とは、穀物以外の畑作物のことで、馬鈴薯、てんさい、たばこなどが含まれる。  
 「種々のもの」は温室作物、種苗、花き、球根、マツジュルーム、蜂蜜、毛皮用動物、馬、山羊などが入る。  
 「複合」とは、いずれの作目の販売額も51%に達しないものをいう。

出所) 1971 Census. Profile Studies, *Large Farms in Canada*, pp. 36-40.

大規模法人農場の資本主義的性格は、賃労働雇用の大きさにはっきりとあらわれている。大規模法人農場全体の平均雇用量は年間330週（13.2人）、「果物・野菜」は390週（15.6人）、「種々のもの」ではじつに1,464週（58.5人）に達している。

以上を要約すると、現代カナダ農業の資本主義的進化が、大規模法人農場を頂点として、家禽、「果物・野菜」、「種々のもの」というきわめて集約性の高い3部門で最もきわ立っていることは明白である。

## (2) インテグレーションの広範な展開

近年、カナダにおいても農外資本による農業生産部面への進出が目立っている。上述した大規模法人農場もその大部分は農外資本の支配下にあると思われる。農外資本の進出の実態を検討することは、カナダにおける農民層分解の研究にとって不可欠の課題である。ここでは、その主要な形態であるインテグレーション（垂直的統合）について若干の検討を加える。

1971年センサスによると、畜産・家禽の契約生産を行っている農場数は6,660とカナダの農場全体から見ればごくわずかである<sup>32)</sup>。しかし、センサスは「契約期間と当事者の責任を明記した文書契約」によるものしか集計していないので、実際にはインテグレーションはもっと広範に展開していると予想できる。たとえば、1977年に発表されたカナダ農業の方向づけに関する特別委員会（The Task Force on the Canadian Agriculture）の報告は、「農業生産に対するアグリビジネスの支配」の例として、大西洋岸諸州・ケベック・オンタリオ・アルバータの野菜加工（馬鈴薯・テンサイを含む）、ケベックの豚肥育経営、ケベックその他でのブロイラー生産（ヒナの孵化場を含む）をあげている<sup>33)</sup>。

32) 1971 *Census*, Table 16.

33) Agriculture Canada, *Orientation of Canadian Agriculture: A Task Force Report*, Vol. I Part A, 1977, p. 84. 以下の事例も *ibid.*, pp. 84-85.



野菜加工企業は原料の安定した供給を確保するために、農場経営者と生産契約を結ぶとともに、加工企業自体が生産にのり出すようになっている。極端な場合には、1つの企業がニュー・ブルンズウィック州の馬鈴薯生産の40%を自らの経営と契約によって支配していると推定されている（ちなみに同州はカナダの馬鈴薯生産額の19.6%を占めており<sup>34)</sup>、この1企業だけでカナダの馬鈴薯生産の7.8%を支配していることになる）。また家禽部門では、ケベックの家禽農場の80%が何らかの形で加工業者の支配を受けていると推定されている。同じケベック州の養豚農場の大部分は、生産契約によって豚肉卸し業者と飼料会社に統合されている。最後に、カナダ全土の多くの鶏卵生産者は融資協定の一部として飼料会社との飼料購入契約を結んでおり、卵価が相当低下した場合でさえ割当量以上の過剰生産をまねくのではないかと危惧されている。以上であげた事例は資料の制約もあって断片的だが、カナダにおけるインテグレーションの実態の一端をのぞかせているといえよう。

こうした農外資本の進出は、上層経営への資本と生産の集積と相まって、上層経営の性格を変化させている。「利潤のために『穀物産業 (the grains industry)』や『肉牛産業 (the cattle industry)』を営む農企業家 (farmer-businessman) という自己意識が、彼（大農場経営者——引用者）をして、自らを同じ商品分野の非農業部門とより密接に一体化 (identify) せしめた。大農場経営者は、食品産業の農業関連部門の1パートナーになっている。』<sup>35)</sup>しかも、農外資本の進出はアメリカ金融資本のカナダ経済支配との密接な関連の下に展開しているのである<sup>36)</sup>。以上の点をふまえて、今後この分野での実証研究をすすめ

34) 1976年の数字。Canada Grains Council, *Canadian Grains Industry Statistical Handbook '78*, p. 217 and p. 224.

35) Mitchel, *op. cit.*, p. 15.

36) 「合衆国との経済的統合は、アメリカの需要にカナダの生産を適合させるだけでなく、アメリカの過剰資本にカナダというはけ口を提供することも意味した。農業における大規模で、流れ作業的な生産への加速度的な趨勢から見て、法人農業経営 (corporate farming) はアメリカの投資家にとって大きな魅力となっている。……土地価格の上昇および統合化・法人化された農業への趨勢は、自立経営を維持・発展させようと努力するカナダ人を上回る優位を、集積したアメリカ資本に与えている。」(Bronson, *op. cit.*, pp. 133-135)

ることが筆者にとっての課題である。

## 結 び

これまで、センサス資料を中心にカナダ農業の構造と農民層分解の特徴を分析してきたが、そこから明らかになったことを要約し、今後の課題にもふれることで結びに代えたい。

第1に、戦後とりわけ1950年代以降に、大量の離農と農場数の激減、機械化・集約化を軸とする農業生産力の発展、1農場当り経営面積の増大という農業構造の大きな変化が生じたことである。

第2に、ミッチェルの著作では必ずしも明確でなかった農産物販売額別にみた経営諸群の階級的性格について、独自の階層区分方法によって、資本主義経営の増大、中農・小農経営の大幅な減少、プロレタリア経営の比重の増加という両極分解の傾向を確認することができた。上層経営とくに資本主義経営は、資本・賃労働・生産のますます大きな部門を集積しており、現代カナダ農業が資本主義的進化をとげていることは明白である。

第3に、農民層分解の進展と相まって、法人農場の増大と農外資本の進出とが目立っている。とくに、家禽、「果物・野菜」、「種々のもの」というきわめて集約性の高い部門では大規模法人農場が生産の1割近くを占めている。

第4に、以上の特徴をもつカナダ農業は近年の資本主義的成長が著しいという点で、先進資本主義諸国の中でも群を抜いている。以上が本稿からひき出される結論である。

そこで、次に問題となるのは、こうした現代カナダ農業における資本主義的進化の急速さがどのような要因・メカニズムによるものかということである。ケベックを除けば土地所有に封建遺制が存在しなかったこと、労働市場の展開がおくれていることから兼業化するよりもむしろ離農・挙家離村する 경우가多いこと、そしてさらには北米大陸の畑作限界地というカナダ農業の地理的条件等々が階層分解を激化せしめたとも考えられる。これらの点を手がかりとして

現代カナダ農業の独自の位置を確定する作業によって、先進資本主義諸国の農業問題・農民層分解についてのわれわれの認識も一段と豊富化されるであろう。だが、それは本稿で設定した課題をすでにこえている。今後の課題としたい。

(1981年8月11日脱稿)